



西念寺だより 水無月号

平成30年6月1日

〒610-0331 京田辺市田辺北里29番地

TEL 0774-62-1027 0774-63-2912



本当の優しさ - 慈悲の心とは

最近テレビ等で、特別アドバイザーに就任したイチロー選手や念願の大リーグ、エンゼルスに移籍し投手と打者の「二刀流」旋風を巻き起こして大活躍の大谷翔平選手がよく報道されていますが、その少し前には、元広島カープの衣笠祥雄選手が亡くなられたニュースが流れ、「鉄人」と言われた強靱な身体を持った方の訃報に、野球に詳しくない自分もとても驚きました。

衣笠選手といえば、京都市出身で16年以上に亘って2000試合以上に連続出場されたことでも有名です。しかも死球が通算歴代3位の記録で怪我も多く、「重傷」と診断された事も何度もあったとか。



ある新聞記事では、以前巨人戦で西本投手から死球を受け、左の肩甲骨を骨折しながらも翌日の試合では代打で登場し、三振したものの3球ともフルスイングしてみせ、試合後の会見で「1球目はファンのため、2球目は自分のため、3球目は西本投手のためにフルスイングしました」と述べられたと書かれていました。

死球は与えた投手の方も傷つくことがあります。重傷を負わせて、打者生命を脅かすようなことがあったら、お互い悔いが残ります。「昨日の試合のせいでバットが振れないなどということはないから安心してくれ。」、そんな想いでフルスイングされたのでしょうか。それは西本投手を励ますとともに、自分自身を奮い立たせるスイングでもあったのではないのでしょうか。「鉄人」と言われた衣笠選手の強靱な肉体の中に、人一倍他の人を思いやる優しさの現れではないかと思われま

す。この衣笠選手の慈悲の心と言ってもいい優しさと同じような逸話が、お釈迦さまの故事の中にあります。お釈迦さまは、80歳のお歳になられても各地で説法の旅を続けておられました。ある時、チュンダという鍛冶屋に招かれ、茸料理の供養を受けました。ところが、その家を出た後にお釈迦さまは激しい腹痛に襲われます。「背中が痛む、座を敷いて欲しい」と願われ、木の下で横になられました。お釈迦さまは自らの死を覚悟しながらも、チュンダの食事が災いしたと訝しむ弟子たちに告げました。「私の生涯の食事の中で、悟りを開く前にいただいたスジャータの乳粥と、最後の食事となったチュンダのものは特別である。それ故に決してチュンダを責めることなく、大いなる功德があると伝えてくれ。」と諭されたと言われています。お釈迦さま亡き後を生きるチュンダには、悔恨の思いを持たせてはならないという計り知れないほどの深い心遣いです。



衣笠選手も死球を「生きたボール」にしようとしてフルスイングされたのでしょうか。ほんとうの鉄人とは、自分が一番辛いときにも、相手に辛い思いをかけたくないという心遣いができる人と言うのではないのでしょうか。心こそ鉄のように強靱であったればこそ、前人未到の連続試合出場記録を果たす事ができたのではないかと思います。

日々多忙で、常に時間に追われる毎日を生きる私たちですが、元祖法然上人のみ教えのもと「南無阿弥陀仏」のお念仏を通して、人の苦しみを我が事のように感じ、人の喜びを我が事のように受け止められる、また自分の事だけに捉われず、困っている人がいたらすぐに手を差し伸べられる、そんな優しい勇気を持ちたいものです。裏面に続く



